

科学図書館ブックレット

五月雨抄

三浦梅園著



科学図書館



五月雨抄

三浦梅園



## 五月雨抄序

五月雨のふりつゞきとひ来る人も稀なるまゝ窓の前にかな文引ちらし読けるに、世の中の人の心はいとのごとく染るにかはりちまたのごとく行くにしたがひ習により教につれてさとするもありまどふもありまどふよりしては非をとめて是としくるしみをかへてたのしみとなしおほやけの罪にかかりて猶自よしとなせしはかなし事ども哀と書とめけるをかたへなるわらはへ是は世にいましめていはぬ事には侍らずやといひけるに答ける様まことに古人これも一時かれも一時といふ事ありあらかじめ其奸をすれば誰か其とがめにならはん知ざるより迷ふ道なれば前車のくつがへるをしめすは後車のいましめにあらずや西洋の教は今世たえ侍れども術をさしはさみ人をたぶらかす類はまませに聞侍るみな其故知にならふ也むかしの跡しり侍らばいかでかかる浅ましき計に落入べきわれきく西洋の人のひとの国をとらんとするや干戈をうごかすをつたなしとすさるにより其国を奪んとすれば先金銀穀帛を以て寡弱をたすけ貧窮をにぎはし医薬を以て疾病をすくひ奇巧を以て人の耳目をまどはし終に天主三世の説を以て人の心をうごかし君にも親にもかへざるものとおもいこませ人心の已にうつるをみて兵を以てこれに従ふれば一挙してその功を収むとかやさればもろこしのみなみにあたつて海中塔伽沙谷タカサゴといふ島あり阿蘭陀人とりてありしが明末鄭成功に逐れて後南のかた咬啮吧カラバといふ島にわた

り地子を出しぬす人ふせぐ為とて城廓をきづきその土の人に財宝をあたへ其餌に上るをまち  
 終に其本国呱ジャブ暄までをとりこれより諸国に往来す又寛永の比ようすといへる蛮人 公にうつ  
 たへけるはむかし西洋より呂宋ルスンといへる島をとらんとて其宗門をひろめ何事なく手に入たり  
 日本は金銀宝物多き国ゆへ彼よりのぞみをかくる事久しと申すにつきようすには屋敷をたま  
 はり是日本一洲の大敵なり根をたち葉をからすべしとて属託金ソクタクキンを高札にかけ置れ終に四海を  
 清め給へりわれ瓊浦に遊びし時吉雄耕牛かつてかたりし西洋此術を以て近ごろ蝦夷エゾの北辺の  
 地を収めたり 国家まさに北のおもんばかり有べきとぞ我国耶蘇のさわぎもともに同一術な  
 り已に数十万の殺戮にいたるといへども其国恬然としてあづからずそのたくみしるべし鎮西  
 はこれにまどひ中原は信長一旦のあやまりにより禍をひく事数十年幸に太閤秀吉始に其好を  
 てらし神君後にその弊をのぞき蒼生の耳目ふたゝび明なる事を得たり此故に其国はさらなり  
 もろこしより渡れる文もわずかに其名あればすみぬりやきすてになりぬしかるに 有穂院殿  
 の御時司天監より天文推歩の為に願出けるに噂名目ゆるされ西洋の書もひもどきはじめ天文  
 地理草木臟腑等の類は飜して梓にちりばむる世となりぬ神祖のあつくいましめ給ひしも有廟  
 の禦書をゆるし給しも一張一弛の道にしてともに其沢を蒙る事に侍る其上 神君も愚民のま  
 どひてつみに落入事をなげき給ひ南禅寺の 崇伝長者に命ぜられ正邪の別を文にあらはし天  
 下にしめし給ひ禅人鈴木正三の破吉利支丹でうす問答のごときも其後ゆるされて木に上し世

に行れ侍れば五月雨の淋しさ慰むる筆むる筆の後誰見よとどむるにもあらざれば衣魚シにあ  
たへんひま何かくるしかるべきもしもみん人のこりてつつしむ端ともならば何か是にまさる  
べきとおしまづきにさし置ぬ天明甲辰五月日二子山人三浦すゝむ

## 五月雨抄上

三浦 晋 著

天地はまどかなる物なりさるにより手まりのごとき地に五大洲とて五の大壤ありからやまと天竺だつたんなどいへるは亜細亜アジアといへる大壤の内なり夫より西に利未亜アラリアといへるあり又其西に欧羅巴エウロパといふ有又西にゆけば南北に横れる大壤あり南亜墨利加ソウデアメリカノラルトアメリカ北亜墨利加アメリカといへり大様は亜細亜アジアの下にあたりて是れを過れば又其国の東に出るなり欧羅巴の地又西洋ともいふこれより我国は万餘里をへだつればまことに風の音信もなき国なりしかるにかの国は智巧ことに勝れ天文地理に達し日月星辰のある処を測りて自の船のある処をしり羅經じしやくを以て鍼路をさだめ万里の大洋を掌中に置き自在にひとの国にかよひ利を以て啗し教を以てまどはしひまをうかゞつて人の国をうばふさる程にたよりなる地を得て出張をかまへ財貨をはこびたくはへ諸国に交易すさるほどに今は南海の諸島みな西洋の有となれり南蛮とは天竺南辺海上の諸島にてみな亜細亜に属す亜細亜は孔子釈迦の教を奉ずる国なり欧羅巴には中むかし耶蘇ヤソといふもの出て教をたてたりかの国にて聖人といふは是なりそれにやうどといふものあり耶蘇と其道をあらそひ後にはやそやうどにころされしかども其教は次第にひろまれり彼地の教三つありきりすてあんといふ有耶蘇の教にしてここにきりしたんといふものなり一つはまあごめたんといいりこれ莫臥兒モゴルの法にして今ひとつはへいてんともいひぜんていうともいふこれは二



法さかんにして今はおとろへけるとなん又亜細亜の西にあたりて天方国といふあり天方の東  
 に回回フイフイといふ国有唐の時回鶻クワイコックといひし国なり此国また一法あり回回教フイフイといふ仏教もかの国に  
 もあれどもさかんならず儒教をばかの国にてはこんふうよじすとよび其徒みづからはあてい  
 るすといふよし宝永中邏馬ロウマのはつていすが儒教のことを新井筑後守に対し己が教の大なる  
 にほこり此教もかなたに久しくありといへども支那もと東南の一隅其化猶域中に行ふ事能は  
 ず何ぞ敢て他に及ばんかくのごとき小数ありといへどもなきがごとし天下の教とするにたら  
 ずと大言せし事采覧異言にみへたり我国の害をなし数十万の生命をあやまちしは此きりすて  
 あんの事なり今字に吉利支丹とは音をかるや切死丹とは調伏の言なり公に是を用ゆるこし  
 の事は武徳大成記にいにしへは此法なかりしに明の隆慶万曆の比泰西タイセイの利瑪竇リマトウといふもの来  
 り浙江府の内荒地のありけるに一字をまうけ学文し終に彼の国の言を漢語ヤムに訳し天主教義崎  
 人十書友論などいふ書をつくり人をすすめ誑タブラガしける年月を経て其法を信ずるもの多くなりけ  
 るをきき龐迪我ホウテキガといふものその徒数十人をしたがへ利瑪竇に従ひ七克書などいふ書をつくり  
 愚なる民に金銀をさづけたぶらかしける故いよいよその法を信仰す畢竟世世を経て国奪はん  
 はかり事なりといへりとあり武徳大成記は貞享三年 台命によりて阿部豊後守正武を奉行と  
 し林春常、人見友元、木下順庵をして撰ばしむと序にあり

一、耶蘇の乱禁綱つよくして三十四種の禁書といふ有その外名目にも出たる書は入られず

## その名目

天主 耶蘇 西洋 欧邏巴 利瑪竇<sup>リマトウ</sup> 利太西 利山人 陽瑪若 湯若望 游芸<sup>字子六</sup>  
 景教 彝学夷 西学

## 三十四種禁書目

天文初函	畸人	西学記	辨学遺牘	幾何原本	天文略	代疑篇
三山論学記	三論学記	唐景教碑附	天主実義	天主統編	職方外記	同文算指
圓容較義	勾股義	万物真源	滌平儀記	計開	十慰	交友論
七克	弥撒祭義	泰西水法	表度説	教要解略	聖記百言	二十五言
靈言蠡句	況義	渾蓋通憲図説	測量法義	簡平儀記	滌罪正記	

この外にも禁にふれて焚塗にあふもの多し禁書と異なる事なし

## 貞享年中焼却之書目

實有詮 一部六本

貞享二年乙丑拾五番船持来官命焼レ之又記云是ハ耶蘇宗門ノ書ニ紛無レ之ニツキ一艘向キ  
 商売不レ被<sup>レ</sup>仰付<sup>レ</sup>御返ナサレソロ

地緯 一部二本

貞享三年寅五月焼卻是ハ世界ノ図ニ吉利支丹国ヲ贊シ其上一両所耶蘇宗門ノ事有レ之故焼

卻但教化ノ書ニテ無レ之故書目判形サシ上ソロ

福建通志 一部六本

貞享三年寅六月焼卻是ハ凶ノ内天主有レ之

有学集 是ハ貞享三年奉行所ヘトドマル

方程論 一部四本六卷

梅文鼎所著序中餘諭利泰西ノ号及禁書ノ目ヲ載ス別記ニ元禄十四年四十二番持来トス

西堂全集 一部二十六本

右詩集ノ内外国竹枝詞ニ欧羅巴ノ詩二首ヲノス別記ニ宝永三年丙戌五十五番持来トス

其外

天経或問後集 游子六著

帝京景物略 八本

通鑑明記全載 一部八本十六卷

定例成案

新例 一部十六本三十卷

本朝側例類編 一部四本十二卷

増定広輿記 二十四卷 蔡九霞先生増定

增補山海經廣註 仁和吳任臣注 六本十卷

檀雪齋集 十二本四十卷

性理大中 一部十二本二十八卷

譚友夏合集 六本二十三卷

三才發秘

願學集 十本八卷 鄒元標著

西湖志 八本 志八卷 田汝成輯 志餘十八卷 姚靖增補

西湖志後集

禪真逸史

名家詩觀 康熙戊午漢鄧儀選清詩

蘇州府志 一郁四套二十六卷

仁和縣志

丹徒縣志

瓊山縣志

縉雲縣志

新卿縣志

諸羅縣志

南成縣志

延平縣志

疑耀

明史藁 一套六本

是等みな貞享元禄宝永の頃焚棄塗抹の書なれば学者もてあそぶべきものにあらず其查法二途名目噂と教化なり禁綱嚴なりし世はたとへば蘇州府志には教化なしといへども清世祖章皇帝の碍銘尊敬信仰の文句あり名家誌観には贈三太西洋湯若望詩あり方程論には西学算法の題名蠻徒の名禁書の題号をのせたる類わづかにも名目噂にもあづかれば塗採若教化にあづかれば焼却し侍りしかるに司天監より西洋の学は天文地理に深ければ推歩家有益の書はみることを得んことを願しかば享保二年噂と名目とは免許あり教化の禁のみふるきによれりさるほどに禁書目中には天文略、交友論、幾河原本(マヤ)、泰西水法、職方外記、同文算指、円容較義、渾蓋通憲図説、測量法義等 免許あり其外増定広輿記、名家詩観等も世に行ふべくなりぬ長崎吟味かたよりの書付うつし一通左にのせ侍る

申上覚

帝京景物略 一部八本廿八卷

右之書籍の内第四卷目第五卷目天主堂利瑪竇墳之義相記御座候天主堂の内耶蘇儀事堂之建  
 様等并耶蘇生卒之義書記御座候利瑪竇墳之処には始て蠻国より中国へ来候義其時分之天子  
 利瑪竇を御用被遊候義并死去葬礼等の義書付御座候

乍去景物略一部之主意はもと北京の風景土地の勝槩などを記し置申候書籍故両卷の外に耶  
 蘇之義無御座候

右両篇の文体之内人に教を施し人を其道に勸入候様成義辞面に曾て無御座候併詩人之詩杯  
 謝し御座候には其學術徳功之事を嘆美仕御座候迄に相みへ申候其段は大意書被仰付候節辞  
 面一通書付指上申候通に御座候已上

元禄八年乙亥三月十九日 春徳寺

岩永元當

片山元正

一、その国国にて習はし異なり先土着行国といふありから日本のごときは土着とて人民その  
 土に安んじ室屋域郭をかまへて居る類也行国とはきつと我居所をさだめず時にしたがひ宜し  
 きをみて処るからやまとの類は自の封境をかぎりてまもる其外をもとむるをば遠略をつとむ  
 とて非とする也西洋の諸国は海内を一視して万里を遠しとせず己が属国として交易の利をむ  
 さざるひとの国を奪はんとすれば先利を以て人の心をうつす我国耶蘇の一乱も彼この術を用

ひたり

一、伊吹もぐさといふことは芸州広島城下柴谷吉左衛門といふもの剃髪して西心と号し回国して江州伊吹山ちかき柏原といふさとの教信寺といふに得たりとあり其大略に曰信長江州安土にあり長崎へ外国より異様の人來るときき見まほしく思されけれど肥前は隆造寺の所領なればとて將軍義昭の命を矯り佐三郎谷源内といふものを遣してこひける隆造寺即一人を登せけりこれも歐羅巴の地の人なり南蛮をへて來るゆへこなたにては南蛮といへり來るものゝ名はうるが**んばてれん**といへりばてれんとは師たる人の名にして弟子たるをいるまるといふ由なり永祿十一年九月信長に謁す訳詞を以て其來る故を問へば日本に仏道を弘めん為といへり実は彼国より我国を奪はん為に渡せしなり信長こと様なるにめでとどめて其道をひろめ見ばやと有しを儒臣天敬院法橋道仙其礼法衣服神にあらず仏にあらず後日の禍を醸さんもはかりがたし早くかへすにしかじと申せしかば他臣も是に同じけりされど信長むかし我国になかりし仏の教もひとの国よりぞ伝へたるゆるして彼がなすわざ見ばやとて菅谷九右衛門長秀に仰せて京都四條防門に四町四方の地を賜りそのなすわざをまかせけるもとよりかれはかの国より我国に金銀多きをしり国を奪はん為に來りつればかの王よりいろくの財宝は心のまゝにわたしける望遠鏡顯微鏡も信長に謁するとき捧げしものの品なりさてうるが**ん**国より財宝おもふままに取よせ善つくし美つくし堂塔ひかりかがやくばかり結構せりよつてその院を永祿

寺と号せり年号を以て寺号とする事比叡山延曆寺の外例なし 平城天皇大同中に大和の国片岡山に大同寺といふを勅許ありしかども叡山より其額うち破りすてしたためしどもいひて嗽訴に及びければ 正親町院広正を勅使にて此事を信長に告給へば信長みことのりいなみがたくて南蛮寺と呼び江州甲賀郡にて五百貫の地寄附あり弘法デハフの爲また其徒招くべきよしなりしかば又ふらてんばてれんといふをよびけるふらてん、げりごり、やりいすといふくすしの上手ふたりともなひたからあまたもち来り若狭小浜につき南蛮寺に行妙法寺にて信長に謁しけりさて四人の者のはかりごとは貧苦痛弱のものをすくひ人心帰向するに随ひ三世の説に術をかり世の人をたぶらかし他なくおもひつかせ軍兵をひそめおそひ奪はんとりさる程に金銀財宝多分にとりよせ楽園を願ひ江州伊吹山に五十町餘方を開き異草珍木とりよせうゑける今の伊吹よもぎといへるもその時かの地より来れる一種なりとかや

かくとだにえやはいぶきのさしもぐさと云事も侍れば伊吹のもぐさは其より名高きとみゆ  
又一種うゑ拵めしにもありしや

寺には天をまつるゆへ本尊はなし七宝の瓔珞錦の天蓋などかざりてまつる事にして珍しき事なれば諸国の人来りつどひてみる事になりぬかの徒これにかまはず方方に人を出して巷にいな橋の下などにふしたる乞食非人世に捨られし病さらばへるともがらを尋あつめむさき身を湯あみさせ宜しき食品あらため衣あたらしくいぬる処もよきにつくろひたうときくすりども



用ひあつく介抱する程に多くは心よくなり死せるをばあつくとり納め貧しきものにはうつくしきあぎやかなる魚鳥衣食をあたへ風呂をわかしかれをすすぎかねどもあたへてかへすゆへまことに現在ありがたき事は仏よりも悦べりやうやく人の帰向するをみてとけるは我国は天主といふものを敬ひ念ずる故其国まづしきものなし我国王ふかく諸国の此教をしらずして貧苦病患にしづめる事をなげきわれわれを遣してこれをすくひ給ふなり此天主を各うやまはば富貴は自在なるべし愚民天主をうやまふ道を知ざる故汝天のにくみをうけ貧苦にせめられ邪慾おこる邪慾又にくみをうけ長くうき世のくるしみをうく、さる故にわれわれ国王の慈悲天主のあはれみを以て汝等今生のくるしみをすくふといへども過去の罪あれば未来の果たすかりがたし疑はば其しるしみよとて三世のかがみといふを出してみせける愚民等これに臨み見るにうつる顔の牛や馬あらぬ鬼畜様のあさましく恐しきかたちのあらはれ出る程に肝魂も身にそはずなり誠にかの国王天主の慈悲には現在の病をまぬがるといへども到来かかるるしみにあはん事のかなしきよとて皆涙を流し何とぞ此くるしみをすくひ給はれといふにぞさらば其法に帰せよとて四十二顆の珠数ごんだつといふをさづけとなへ言をおしへ七日精進してその文となへ又鏡にむかはしむるにこの頃に引かへ柔和端嚴の菩薩などいふべき相を顕はしけるばてれん等その機のごくを見わづか七日の精進だにしっかり生涯此道を修せんには福德かぎりあるべからずさるからに今天主をおがませ侍らん一度天主を拝するものは此世にたと

ひ張つけ火あぶり獄門水ぜめ火ぜめ牛裂車裂にあふとても一旦の事にて未来は安樂にすく  
 ふなりこれに心をうごかさずおもはば拜ませ申さんといへば皆唯唯として是をもとむよりて  
 先くるすといふものを出す其製黄金にてさきに二寸ほどに二尺ばかりの柄をつけたがたわ  
 さびおろしのごとく針をうゑならべたるを出し右のものどもに肌をぬがせ背中をかきむしる  
 に甚いたみて血流れ出其流るる血を手にぬり左右の手を合せおがませ此天主の為にはかかる  
 苦をうくるとも露いとふまじきぞ未来を救ひ給へとちかひてむかはしむれば其絵は美女の幼  
 児に乳をのましむるの形なり此主汝等の愚なるを此児のごとく救ひとるぞ有がたく思へとて  
 絵を収れは愚民等いよいよ有がたく皆其門徒になりにける其内加賀の僧惠俊和泉呉服屋安左  
 衛門同国黒手村百姓善五郎高足にて入門の後惠俊をばびやん安左衛門をばごうすまう善五  
 郎をばしゆもんとよび専ら愚民を引入けり是より人群聚をなし其徒に帰する事老弱男女をい  
 はず金一分づつをあたへけるほどに皆人思をかたむけけり又門徒たるは毎日人ごとに米壺升  
 銀八分をあたへける天正二年五月信長京師にいたり其様くわしくきき安土に帰り給ひ大に此  
 事をくひ諸臣に対しさきに我此事を議せし時文敬院我をいさめしかど我用ひず今かの徒の所  
 行をみるに金銀財宝を惜まず人心をまどはし収む必定我国をうかがふの所為とおもはる今は  
 南蛮寺こぼちすてまくおもふはいかにと有ける前田徳善院申さるるは南蛮寺いまにては手の  
 びになり此勢をかへさん事手を以て大海をささふるに似たり此座の御家人はいざしらずその

他の大名小名ただ其門に心をかたむくもしこれも亡さんとならば恐らくは禍蕭牆の内におこらん只事やむにしかじと有ければ信長いよ／＼くやみいかがして此患をひるがへさんやと沈思し絵ひし頃撰津国荒木攝津守村重そむくよし早馬きたり猶干戈の沙汰世に多くおしうつりぬ天正六年高山右近敵方にくみしたる聞へあり信長彼ばてれんに高山をみかたに入よさなくば宗旨立まじきよし仰ありければばてれんすすめてこなたに帰向せしめ其事も穩になりぬ

肥島戦記には天正六年四月信長毛利輝元と取あひあり毛利より山中鹿之介こもれる三ヶ月の城を攻亡し大坂にては本能寺是と一味し荒木攝津守村重は池田花熊伊丹イダミに城を築き高槻の城に高山右近友祥茨木に中川瀬兵衛敵の色をあらはし毛利右馬頭中国十三州の勢を卒し播州をきり従へ勢已に撰をのめり信長羽柴筑前守秀吉を以てささへらるといへども孤軍敵しがたく信長の出馬をこふといへどもとかくに其事も滞り世には信長一生の卑怯と沙汰せり信長ふかくおもんばかり耶蘇を信ずるをしり伴天連をよび高山右近にくみする事不忠の至りなり汝が宗門正を守るとならばかれもとより汝が宗門を信ずる事なれば説て身かたに帰せしむべし此義あたはずとならば無益の宗門破りてすつべしと有ければ伴天連恐をなし高山に説けるに我信ずるかたよりなればすみやかに信長に帰降し中川もみかたに属しけるほどに本願寺も石山の城を退き毛利の勢もしづまりける信長もこの功を以てむかしのままにしているはせられざりしほどに其教いよいよ世には広れりといへり

同十年六月には信長も亡び給ひ秀吉兵馬の権をとり給ひぬここにおいて其徒の奸を照され同十三年此寺を亡し給ふ永禄十一年より都合十八年の間なり其内天下に四十二ヶの本寺末寺その数をしらずとなり其故は秀吉淀の城にましませし頃中井半兵衛といへるよき大工<sup>タクミ</sup>あり太閤の氣に応じ修理大夫と改め天下のたくみの棟梁として時めきしを奸徒これを引入れんとてかのはびやんを遣して中井はつとめのいとまなかりしかばかれが母をすすめける母は念仏三昧の人にてうけがはざりしかば僧を招きて論議せんも事ゆかずば恥なるべしとおもひ四條通柳馬場に白応とて居士の有けるを招きはびてんと論をはじめけるはびてん仏の教をそしり我宗門にたうとむはでいうすといへる仏にて天地の間末物あらざる先に出日月人物鳥獸草木大凡の品にいたるまでつくり出し世の中をたて世の人をすくへり故にこの仏をたのめばたすけ給はざるはなし今この法にて仏といひ神といふは皆むかしの人なる釈迦は浄飯王の子なり弥陀は法蔵比丘なり 天照太神といふも八幡菩薩といふも皆人なり人が人をすくふべきや其言は皆妄語なりうたがはしくは是みよと自携の箱より三部經法花經を出し是各 尊む所なりとて取出しづたづたに引きき鼻をかみ押もみなげ出し踏ちらしいばりしかけ実<sup>マコト</sup>に貴き物ならば我に罰あたるべし罰なければ人をたぶらかすの反故なりなどさんくゝに悪口しける白応は終始頭うなだれて聞居けるがはびやんがおもふ程言終るをまち其方のいふ事はそれにてでいうすの法もその通りにやさあらはでいうすの法も埒明ぬ仏かなさほど天地の始に居て万物をつ

くり出せるほどならば何故邪佞奸悪貧苦疾患の人をばつくり出せるぞそも何の為につくり出せるぞとせめかけ問ければはびやん当話につまりて縁なき衆生は度しがたしとてたんとするを白応衣の裾をとらへ今の言は我仏の言ぞにくしとてあたまをたたきければ狼狽してにげさりぬ中井興ある事におもひ淀に出仕して物がたりの次手この事どもいひ出けるに太閤われ信長の前にてききて知れり信長時のいたづかはしきにつきてそのままにすておかれたり長くたつべき宗にあらずとて増田太衛門長東大藏太夫に三千餘兵をあたへ南蛮寺へ遣しうるがんふらてんげりごりやりゐすをとらへ阿蘭陀船に託して外国に送り其党を亡しぬはびやんは其後肥前島原に下りごうすもうは堺に市橋庄作と名を変じしゆもんは島田清庵とて各医療などして堺にかくれ居けりまぼろしの術により秀吉きき給ひめしているいろいろの事させて見給しに最後に秀吉かつて寵せし妾の幽霊彷彿として花園をつたひ来る様を顕しける秀吉天主の餘類なるをさとり直にからめとり拷問有けるにごうすまうしゆもんは極りければ天正十六年九月十九日粟田口にてはりつけにかけられける

武徳編年天正十五年の下に曰く是年迄肥前長崎は大村民部少輔忠張入道理専か領地也蠻夷の謀計ある事をさとらず耶蘇宗門の僧俗を居住せしむる事を秀吉いかり給ひこれを没収して公料となし被宗門の徒の渡海を停止せらる伴天連六人件類二十人を捕へ京大阪を引渡し長崎に送り磔にし且鍋島加賀守直茂に長崎を預けらるる処堺長崎の商賈其利を失ふ由訴る

故西戎南蛮の商船入津は許し耶蘇の乗來ることを停止せらる事嚴密なり

慶長十六年肥後宇土八代の二郡に其徒嘯聚すといへども追迫にしてしづまれり其後餘党まほろしの術をしかがみを見せ人をたぶらかすものある由きこえていたく吟味あり其餘党をとらへ俵に入五十俵づつつみあぐれば下なるもの苦にたへず改宗せんといふをばこれをころぶといひてゆるして猶先非をくひざるをば焼ころしてすて給ひぬそのころべるもの己が望の宗に歸らしめ檀那の契約ありて我且那ぞと券テガタをとりて渡す寺うけ状のはじめ也些其頃遠州富士郡すみたけといふに此宗門をころごうすもうが餘類なりといへり程なくしづまりぬ此ときころばざる輩京郡大阪処処にて火あぶりさかばりつけいきはりつけ中さきなど数数ありそののち寛永十四年十月肥前島原に餘党おこり十五年寅二月十八日に事治りぬ永祿十一年より寛永十四年にいたり七十年の間信長一旦の思ひあやまりにて毒天下に流れ人をころす事いくばくぞあやまるに毫釐を以てすればたがふに千里を以てすと古人の金言有人を治るものいたくこりざるべけんや

一、長崎縁起を案ずるに享祿三年庚寅南蛮ぶね始て豊後府内に來り大友宗麟に鉄砲二挺を獻じたりそれより廿二年をへて天文二十辛亥のとし來りて石火矢を獻ぜりこの時長崎は木村理專といへる大友幕下の士のしれる所なる故みなとよしとて此所に黒船入べきよしにて十七年へて永祿十年丁卯八月廿三日はじめて長崎に入れり此とき世みだれたる時なれば誰制する人

もなく異国船おもふ様に來り元龜三年辛未には町も出來ける爾來南蛮より耶蘇の徒入り來り愚民に金銀をあたへいろいろのあやしき術どもしめしてまどはしけるほどに元龜末より又十一年を経て天正九年の頃はその教次第にひろまりてひとりも残らず切死丹となりぬさるにより奇觀とて彼徒の寺十一ヶ所をむすびばてれんの居処としていよいよ法をひろめける此頃耶蘇の法海内に行はれて大名にもこれを信ずるもの多く太閤南蛮寺破却の評議も伊吹もぐさには石田治部少輔小西攝津守高山右近等二十三人門徒ありて早くかの寺へ告げるとあり高山右近はばてれんにすすめられ信長に歸せしがいく程なく信長も明智にうたれぬこの時右近太閤とともに剃髮して南之坊と号し山崎のたたかひに軍忠をはげまし終に明智を亡しける故摂州高槻ツキにて七万石を賜はり従四位侍従にて猶尾州小牧柴田羽黒相州小田原朝鮮のたたかひしばしば戦功ありし人なり太閤切死丹破却の時初心を改めざるをにくみ加賀大納言に御あづけありしが加賀より三万石を扶助してありけり連歌茶なども達人なりしかども耶蘇の法にふかくそみ猶大久保石見守と密謀あるよしきこへて慶長十九年三月二十日妻娘乳母下人西洋国に追放なり又内藤飛驒守忠俊といへるは 東照宮につかへ軍忠をはげましける一万七千二百石を領し志州鳥羽の城主なりしが南之坊とともに耶蘇に歸しけるを毎度此事改むべきよしの 鈞命を用ひず此時おなじく追放にあひぬ其外右の類のもの百餘人に及べりとぞ忠俊は呂宋國にて久しからずして死し南之坊は長命にして日本より渡海の船にあひむかしをくやみ茶饗し連

歌などしたりといへり

武徳編年を按ずるに慶長中信長高山等をみかたに帰してより安土の城に寺塔をたて其教日に盛なりしが 神君の御時一人の伴天連かへり忠して申けるは畢竟かの教は国土をかたむくべき謀の趣 上聴に達し 制禁嚴にして同十九年三月加賀利常朝臣より伴天連高山右近友祥入道南之坊内藤飛彈守如安等を禁錮して京に送る細川忠興より加加山隼人をとらへ遣すかれこれ邪徒百七十餘人禁獄せらる板倉伊賀守勝重山口但馬守雅朝と談じ東に訴る所間宮権左衛門伊治をさしよせられ彼等を長崎に遣し残党七拾餘人は奥州津輕外浜ツガキトガに謫せらる同十月長崎より奉行長谷川左兵衛藤廣羽書をささげ高山内藤其妻子ともに獄舎に入置猶謀をめぐらし鎮西の伴天連をとらへおなじく禁錮せしむ時に高山が娘は加州の長臣横山山城守長知が妻なりけるを父しきりにこふとて是も長崎に送り獄に下れり彼の宗門の法には死を専とし未来の冥福をもとむる故なり此旨アマカハ亜媽港に聞へしかば亜媽港より迎として百餘人長崎に入津せり因て藤広かの船にのせて放ちやりぬ平戸の松浦肥前守隆信が士卒を以て長崎表高来郡有馬辺の耶蘇の徒の民屋を破り其画像を証拠としあつく信仰するをばとらへて獄に下し信うすきをばさとして仏に帰らしめ松浦をとどめて長崎を守らしむる由言上す同年十二月には関東大阪和睦なり同二十日藤廣肥前耶蘇の徒静謐のよし告来り人彌太平の思ひをなしけれ

按ずるに縁記には呂宋とあり編年には亜媽港とあり編年はなるべし



さる程に大様は耶蘇の徒此時にたえぬる様なれども遺奸多く折折国憲の妨をなしけりさて大友宗麟は兼六州の太守と称し九州の探題として勢甚盛なりしが西洋の船の往来にかの法に帰し其臣田原照忽最これを尊みける

按ずるに九州記には大友宗麟西洋の法を無辺如露法師因果居士などいふにすすめられしと有肥島戦には宗麟始無辺如露因果に帰し後には耶蘇に帰すとあり因果居士は天正七年安土にて浄土日蓮宗論の時に出たるよし信長家譜にみへたり武穂編年に慶長十七年七月晦日京師より駿府へ因果居士といふ異人来りける 神君かねてしり給ふ故めて年を問給ひければ八十八歳のよし答ふこれを駿府にとどめ給ひ古事を談話あり翌八月十九日の夜日野唯心叟傳張老と 神君に侍せし事みえたり此居士宗麟の時の居士と一ならば肥島戦記の説是なるべし

又一書に大友義鎮耶蘇に帰し筑紫の神社仏宇多く毀廢に及ぶ事大樹光源院にきこへ如漏法師をめし信長をして其法義を糺さしむるに信長淀の屋敷に於て厩の口にて其状をきき直に檉の棒にて打殺し其首を梟せらる義鎮大に恐をなし大徳寺より真斉和尚を招き祝髪して宗麟と号したりとあれば如漏は天主の徒たるに相違なしいづれ二記ともに誤あるに似たり

よりて海蔵寺をつぶし住僧真寂をころし住吉の社を焼き橋本五右衛門清田因幡守に二百餘の兵をそへ万壽寺をやき

是元龜元年正月

それより吉弘内蔵助といふに命じ豊後国中の仏像をあつめ薪に

せよとて日日五駄十駄づつあつめうちわりやき天正四年清田阿波守鎮忠上野権守鎮俊に四千  
 三百餘の兵をあたへ彦山の諸堂坊舎をやきけりこれを愁ひて宗麟紹忍を調服するよしきこえ  
 ければ宗麟弥いかり神道物道に推のるものをば一一誅すべしとぞいかられる此紹忍の徒に  
 森部といへるめくら法師ありもと紹忍の一族にして田原源藏といふものなりしがのち座頭と  
 なり諸国に耶蘇をすすめ長崎にありしが元和二年たちまち心をひるがへし長崎の奉行長谷川  
 権六に訴へ出自のあやまちを悔ける権六江戸に此旨訴へしかばこれを耶蘇徒の目あかしと定  
 め給ひけるほどに程なく伴天連伊万留満の棟梁ともしれ来りてみなとられけり此森部ころび  
 の始めなり即この元和二年宗旨帳といふをはじめてみなみな戸に所隸の寺いで来りけり是  
 台徳院殿の御時なりされど内分には其ともがあるよしにて寛永六年公より竹中采女正重  
 信豊後高田城主松倉豊後守重正をつかはされ吟味有ける薰執のふかくてころぶまじきといふものは  
 肥前の温泉山に遣しせなをさき熱湯をそそぎ種種に呵責しころぶべしといふものをばゆるし  
 猶ころぶまじといふをば八万地獄といふ第一の熱湯にいれ又長崎西坂にて穴にうづめ又罪人  
 をあつめ焼ころしなどしける故やうやう寛永六年七月にはのこらずころびける故今までたう  
 とみし像をふませけるこれ絵踏の起りなり抑かく乱に及べる事外国と通ぜしに起れりから朝  
 鮮に通ぜしは尤ふるき事なり外国と通ぜし初を考れば長崎白山嘉左衛門といふもの有薩摩に  
 ゆき京泊といふ処にて船をつくり跣カウチ趾に行き南蛮の諸国をめぐりしに始まり元和年中御奉書

下され堺京都どもよりも思ひ思ひに安南暹羅東埔塞占城シヤムロカホチヤヤンに行けり 公此弊をかながみ寛永十一年甲戌外国出船を御停止ありかねて日本より外国に居けるものも帰国をゆるさせ給はず寛永十二年より外国船のみなと長崎一所とさだめられ諸国人津はかたくいましめられ寛永十三年に出島をきづき南蛮人をいれ国人と混せざらしむこれより外国人の種をさがしだし式百八十七人を得て各その国へかへし給ふ寛永十四年天草島原に益田四郎大夫時貞奸徒をあつめ公にそむく、あけの春其首とも三万餘長崎出島の前に梟し蛮人に示さる今の首塚是なり此年南蛮船入津停止となりぬ又来る<sup>アク</sup>夕の春南蛮種子吟味ありてかへさる翌寛永十七辰の年呂宋船壹艘来れり江戸に訴へしに上使加賀瓜民部少輔忠澄下り其人を船より上られ牢に入れ翌日引出し西坂にて六拾壹人首を刎其船をやきしづめ十三人のこしかへしかさねて渡海すまじきよし申含めらるその塚南蛮島といふ永祿よりここにいたり災をひく事七十餘載といへり後正保四亥のとし亜媽港より船式艘来れり各廿餘間の船に石火矢二十餘挺しかけたり我国の法令なれば先石火矢玉葉渡すべきよし時の奉行馬場三郎左衛門より申渡されしに本国より交易の成否うけ給るまでの船なれば渡すまじきと用心の体にもへけり此よし江戸へ訴へ其間に近国の大名或は小身相集り八代海口に大綱あまたはり船もれざる様にもかけ上使松平隠岐守定行六千三百餘人船九十三艘細川肥後守光利一万三百餘船二百餘鍋島信濃守勝茂一万三百餘船百七十餘松平美作守千二百餘船八十立花左近将監忠茂三千八百七十船三十三小笠原信濃守忠次千

六百餘船六十五黒田右衛門佐忠之一万七百餘船二百餘大村丹後守二千山六百船三十其外の大  
小名山野にみちて堅めける程に蛮人膽をおとし先非をくいける故に事なく帰国許されける是  
太平已後の戦馬あつまりし事ときこゆ

長崎夜話草を按ずるにくろぶね入津の初は元龜元年庚午津の外西浦福田といへるに漂ひ来  
り交易し今の長崎を見立て来年よりここに来らんと約しそれより絶ず来る事になりぬその  
頃は異国の船も心ままに來り我國の船も思ふかたに行通ひけるが 國家此乱に懲り寛永十  
二年乙亥異國船停止異國へ何事もとどめ給ひぬ我國のかよひなれたるは東京交趾塔伽沙谷  
呂宋亞媽港東捕塞暹羅等の國なりもろこしは我戰國の頃海賊どもをしわたりて侵しかすめ  
しほどに大内義隆の勘合船より外はいれず入津停止の國は亞媽港

采覽異言曰阿媽港在<sub>二</sub>広東<sub>一</sub>西洋商舶所<sub>レ</sub>泊之私灣也

呂宋

同曰、羅呼ろくそん和呼るこまや、國在<sub>二</sub>東南州中<sub>一</sub>其地頗大、古時有<sub>レ</sub>王、及<sub>レ</sub>後國乱、遂隸<sub>二</sub>  
西蕃<sub>一</sub>其主及將領、盡伊斯把禰亞人、亦有<sub>二</sub>日本流寓<sub>一</sub>分其東地<sub>二</sub>而居、嚴設<sub>二</sub>關防<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>過  
界、其人被服帶仗、不<sub>レ</sub>變<sub>二</sub>本俗<sub>一</sub>、今孳衍至<sub>二</sub>三千<sub>一</sub>、其流寓者、此方教門之徒、放<sub>二</sub>諸海外<sub>一</sub>也、  
伊斯把禰亞

同曰和呼いすばんや、歐邏巴西方大國也、其役、屬者凡十八國、民物豐饒、俗善<sub>二</sub>貨殖<sub>一</sub>、歷<sub>二</sub>

市海外、因得<sup>二</sup>北亞墨利加地<sup>一</sup>、新開<sup>二</sup>其國<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>新伊<sup>ノ</sup>斯<sup>バ</sup>波<sup>イ</sup>爾<sup>ス</sup>亞<sup>ハ</sup>遂<sup>ニ</sup>併<sup>ス</sup>有<sup>二</sup>南海呂宋國<sup>一</sup>、君民一皆崇<sup>二</sup>信<sup>二</sup>天教<sup>一</sup>、尊<sup>二</sup>敬<sup>二</sup>其徒<sup>一</sup>、上下悉依<sup>二</sup>教門<sup>一</sup>而行云。慶長之初、始通<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>此、自<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>絕、其後官沮<sup>レ</sup>之、以下其挾<sup>二</sup>天教之徒<sup>一</sup>而來<sup>上</sup>故也、寬永元年春、遣<sup>レ</sup>使來請<sup>二</sup>貢市<sup>一</sup>、官移告却<sup>レ</sup>之、是後終絕

漢又刺<sup>ア</sup>亞<sup>ル</sup>亞<sup>ス</sup>

和呼いんげらんと意呼ゑんげるていら、波呼あんぎりや、又云あんげりや歐邏巴西北海中

有<sup>二</sup>一大島<sup>一</sup>此國与<sup>二</sup>思可齊亞<sup>ス</sup>相<sup>二</sup>分<sup>一</sup>一島地其一則喜百泥亞也、國有<sup>二</sup>海中<sup>一</sup>、俗能操<sup>レ</sup>舟、人

亦勇悼最習<sup>二</sup>水戰<sup>一</sup>、亦善作<sup>レ</sup>劍、為<sup>二</sup>天下名器<sup>一</sup>西南諸國皆畏、其人以為<sup>二</sup>海賊<sup>一</sup>、王惡<sup>レ</sup>聞<sup>二</sup>其名<sup>一</sup>

即下<sup>レ</sup>令禁<sup>二</sup>市舶<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>聽<sup>二</sup>國人闖<sup>二</sup>出外洋<sup>一</sup>、其國素習<sup>二</sup>天教<sup>一</sup>、教門十戒、他犯莫<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>焉、及<sup>下</sup>王

廢<sup>二</sup>其妃<sup>一</sup>、以<sup>レ</sup>妾為<sup>レ</sup>妃、邏馬教主、以為<sup>二</sup>捨戒<sup>一</sup>、乃与<sup>二</sup>諸國<sup>一</sup>共謝絕矣、慶長五年春此國人与<sup>二</sup>

和蘭人各駕<sup>二</sup>一大舶<sup>一</sup>共到<sup>二</sup>泉州堺浦<sup>一</sup>世伝和蘭始附<sup>二</sup>此人<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>通<sup>二</sup>海外<sup>一</sup>、或其然也、及<sup>二</sup>十八年

秋<sup>一</sup>其王贈<sup>レ</sup>書通<sup>レ</sup>聘、明年復遣<sup>レ</sup>使來、延宝元年夏、來求<sup>レ</sup>開<sup>二</sup>市<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>聽、同書曰、西洋諸蕃、

盤掘古俚麻刺加爪哇、呂宋等國、皆以<sup>レ</sup>利誘<sup>レ</sup>之也、洋舫載<sup>レ</sup>貨、啗以<sup>二</sup>珍奇<sup>一</sup>請置<sup>二</sup>權場於<sup>二</sup>要

地、以置<sup>二</sup>互市<sup>一</sup>、夷中固安<sup>レ</sup>于<sup>二</sup>無法<sup>一</sup>、而關防不<sup>レ</sup>嚴、困託以<sup>二</sup>盜賊水火<sup>一</sup>、願<sup>レ</sup>築<sup>二</sup>土牆<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>護<sup>中</sup>貨

物、既而築<sup>二</sup>保壁<sup>一</sup>分<sup>二</sup>兵屯戍<sup>一</sup>、陰若<sup>二</sup>敵國<sup>一</sup>矣夫利之所<sup>レ</sup>有、權之所<sup>レ</sup>歸、富者為<sup>レ</sup>之貨殖、貧者

籍<sup>レ</sup>之衣食、恩与<sup>レ</sup>威行、皆其私人、攘<sup>レ</sup>臂声四起、客転而為<sup>レ</sup>主、反<sup>レ</sup>掌而已、南方之俗、古

称簡易利孔一開、姦訴百出、真是七日而混沌死矣

華夷通商考日本よりの里数をあげていふ呂宋八百餘里亞媽港九百餘里インキリヤ諸厄利亞エゲレス一万千七百餘里いすばにや一万二千四里

寛永十三丙子のとし蠻人の子孫この国にありしを式百八十七人阿媽港にかへさる其法父を本とし母にかまひなしたとへば母日本の種子にて父蠻人なれば勿論父日本にて母蠻人なれば母のみかへされ子はとどまれり同十六年紅毛の種子拾壹人を探つてこれを咬啗カラツバ肥に放さる右のごとく蠻船停止の処翌十七年阿媽港船来りて交易を願ふ 県富国禁をかるんずる事にくみ給ひ其衆七十餘人の内吟味あり欺かれて来るもの拾三人をたすけ六十一人首をはねその船をやき捨唐人ののり捨船給はり国にかへさる然るに十二年を経て正保十二年又亞媽港より軍船つくり二艘兵糧武具のみつめるとみへたり入来れり筑前肥前の両侯長崎奉行馬場氏と会谈あり兵備嚴重前にのべたるごとく蠻人恐れ只他事なく先年の一艘罪を犯し来れる事国王の心にあらずよつて其事を陳謝し前例のごとく交易を願ふのみと訴る故兵備をとき国へかへさるそれより式拾八年を過て貞享二年乙丑媽港船伊勢国渡会郡神領村フネノのもの漂流してかの国にいたりけるを送り来りぬ 公にも復來の罪を許されかさねて漂流の者ありとも送り来るまじきよし 厳命あり 国家猶我国をうかがふ機あるかと察し給ふなるべし

阿蘭陀は西洋の一國なり寛永の頃阿蘭陀と南蠻呂宋の番島に炮戦して南蛮船和蘭陀に逐はれ

肥後佐志城の浦に迫こまれしを奉行長谷川横六はからひて阿蘭陀をば平戸に置き南蛮をば長崎に入れ炮戦なき様にはからひける寛永十七年より南蛮は停止ありて阿蘭陀長崎に入津せり我長崎に遊びし時吉雄耕牛にきけり西洋諸国のうち阿蘭陀のみ入津赦免は諸国動静治乱を偵報すべきによつて交易をゆるされけるよしなりさるほどに本職は我国のもののみなり

## 五月雨抄下

三浦 晋 著

帝統一百八代 後陽成院天正十八年 東照宮江戸に入給ひしよりことし天明四年甲辰にい  
 たつて一百九十五年猶朝鮮の役どもありて世も静ならざりしが慶長三年太閤秀吉薨御同五年  
 庚子關原の戦石田等誅せられしより兵戈をみざる事十五年慶長十九年元和元年大坂冬夏の両  
 陣あり是より天下一統今に一百七十年鼓腹して太平の化を樂しむしかるに鎮西は島原の乱あ  
 り寛永十四年丁丑より翌寅の春にいたる是元和元年より二十三年今をさる事百四十八年なり  
 島原一乱の諸記を考るに此時將軍 家光公の御治世にて肥前高来郡島原の城主は松倉長門守  
 重次六万石を領し其息を右近といへり同国唐津の城主寺澤兵庫頭忠高八万石に肥後天草島四  
 万石を合せ拾貳万石を領せり此高来郡のあたりは耶蘇の旧染ふかく慶長の頃原の城主有馬左  
 衛門佐康純に日州県の城に引移るべきよし 命下りしかども僕徒多く耶蘇の徒故国をうつる  
 事難渋の告ありしかば山口但馬守宮権左衛門に命じ泉州堺の浦より原の城に下り邪徒吟味彼  
 勢盛ならば各国の諸將を催し誅戮すべしとなりよつて山口高木郡の邪徒をとらへ長崎に送り  
 て西坂にてこれを戮し其骸を封じて京觀をつくり鍋島寺澤大村有馬康純等が士卒を發し耶蘇  
 の寺一一やきすて長谷川藤廣吟味をとげぬ此康純といへるは父を有馬修理太夫直純といへり  
 高木郡有馬の城主なりしが交趾へ奇楠キャラもとめに船つかはしけるを阿媽港人其を奪ひ船のもの



五十人をみな殺しけり慶長十四年阿媽港人二百餘人長崎へ来りしが此ものどもの右の噂せしを聞人ありて直純に告ければ直純憤にたへず公に訴へ加毘丹をとらへ推問しとがある者を殺さんとしけるが蠻人此事を早くさとり船を出してにぐるを追かけて火をかけことごとく焼つくしぬ此時本多上野介正純の与力岡本大八といふものあり直純親しかりしが直純を欺きさりし頃蠻船やきうちの功賞あるべきおもむき其旨上野介沙汰せらるといひければ直純よろこび大八に莫大の金など遣し首尾をつくろはせけるされどもと大八か詐謀なりしかば此事露顕して獄屋に下り阿倍川原にて首を刎らる大八獄中より直純長谷川藤廣を殺さんとせし密謀を訴ふ是より有馬耶蘇宗門たる事しれ甲州都留郡において死を賜ひける長男左衛門康純十五才なりしが久しく台徳院殿に給事し耶蘇に染ざる事を照し給ひ新に四万石を賜はり封を有馬につき耶蘇の徒を糺されけり又長門守事は父松倉豊後守重政ととも筒井順慶につかへかくれなき勇士にて大坂夏障の一番首の功により島原にて五万石を給はりぬ彼地は耶蘇の徒散在する間よく此乱を静むべしとて江戸の諸役御免なり重政封につき吟味あり日日五人拾人づつからめとり或はきりすて或は火あぶり竹鋸引等勢猛にとりさばき其徒程なくつきけり重政武をこのみ驍勇の士を扶助し兵粮沢山にたくはへ家人吉岡九左衛門木村権之丞などいふものを商客となし呂宋に遣しかの国の様子をよくうかがひ江戸に願ひけるは西洋より呂宋を支配し呂宋より南蛮をくみし是より日本をうかがふ故ややもすれば我国動揺の機あり願くは御ゆる

しあらば手勢を以て呂宋を攻とり呂宋にて外患を拒がんと申けれどもかくの報なき内其身もはて重次跡をつぎしに重次酒食に沈緬し諸士を憐まずよつて寛永十二年には家士四十八人立退けりかかるほどなりしかば国民もうとみにくみ此乱を醸しなせり此時小西攝津守行長が家臣に益田甚兵衛好次といふもの有小西没落の後肥後の国に漂泊して有けるが土民の間に沈淪するを無念におもひ何とぞ家を起さんとおもひけるが人心を帰向せしめ党をたてん事切死丹にしくはなしと心ざし天草高来のあたりを往来して愚民をたぶらかし彼これと人をすすめけり是より又郷民ひそかに其像をかけ礼拝讚嘆しけるが人の大勢集る事なればかくるべきにもあらずある時左志来左衛門といふもののかたに老壮集り像をかけ讚嘆しけるを代官ききつけ其処にいたり大にいかり国禁をそむく事をのしり其画像をとつて引きさきふみちらしけるを郷民いかり忽代官をうちころしそれより所所の代官をうちころし高来天草の奸党一時におこり戦しばしば利を得しかば天草富岡の城高来島原の城をせめけるこれ寛永十四年丁丑の冬なり魁首甚兵衛が子に四郎といふあり奸雄にして謀有すこしは書をも読み覚へ居けるを四郎太夫時貞と称しける本姓益田なりしかども世には天ノ四郎と唱ふ此宗旨天を尊む故に此徒たらんものは天の恵あつく生死ともにすて給ふことなし二十餘年前の伴天連今の時にいたりて天より使を下し給ひ此宗世にひろまるべしとの未来記ありこの四郎即それなりとてかの徒はこれを天使と称し大将としけるがもとより不敵の奸賊なれば飛鳥をよんで手に入れ卵をうま

するなどいろく人の目をくらます様の事どもしてまどはしけるほどに愚民は誠に天に通ずる様に仰ぎ尊み其徒数万に及ぶ此事関東に聞えしかば代官として板倉内膳正目附として石谷十蔵さし下さる奸徒これをきき有馬の廢城を修造しことごとくこれにとり籠りぬ飯倉九州の諸將を召ししばしば戦ひしかどもかたずよつてかさねて松平伊豆守信綱戸田左衛門氏継さし下さるの沙汰きこえしかば板倉は口おしく思はれあくる正月元日無二無三に戦ひ討死をとげらる信綱諸卒の命をそこなはんことをいたみ数万数月の籠城糧のつきん事をはかり軍令を嚴にしてまたれしに果して二月廿七日落城し首魁時貞をば細川越中守忠利の手にて陣佐左衛門なるもの討取殘党三万餘ことごとく誅戮せられ再度太平の化に浴しけるよつて寺澤兵庫頭は天草四万石を召上られ長円守は領地没収作州森内記にあづけられ下屋敷にて死を賜はり其子右近は保科肥後守家臣に下されしかばこれを面目なしと思ひ自殺してうせぬ松倉の佞臣岡田作右衛門大町権之介金地院にて首を刎らる

長崎夜話草には大将大江四郎太夫は長崎所生のものなればこらしめに首を長崎大波土ハにて一七日獄門にかけられ籠城の悪徒二万人の首皆一同に西坂といふ所にうづみたり今の有馬塚ツツこれなり

四郎大江とも称せしにや又本姓大江なりしにや

三河後風土記を案ずるに関が原敗軍の後小西攝津守行長は伊吹山の東糟賀郡の寺院にかくれ

居けるが主人の僧にかたりけるは我は小西行長とて今度のさわぎの張本なりとても運をひらくべき身にもあらず石田といふ不覚ものにかたらはれ無下の敗軍口おしき次第也今死しても有べき事なれども我は年来耶蘇の宗門をたうとみ侍り天帝の法には自身を害するをふかくつつしみ嫌ふなり御僧の志忘れがたし早く我をからめとり徳川殿にまいらせよとてとらはれにつきしとぞ石田ももめんの垢つきたるをきてかがみけるを捜し出されける 神君の給ひけるは此輩皆匹夫にあらず今身の置処なきままにつづれをまとひ身をやつし武名をうしなふに似たれども將の盛衰は塞翁が馬なり勾踐呉王のいばりなめたるをも世に恥とせず互に干戈をかまふるは武將の習戦利なきは時の運なり大志あるもの命をみだりにすてざるは將の心とする所なりしかるを其ままに引渡さばわが恥辱なるべしとて衣服を給ひけるよししるせりおもふに石田も耶蘇の徒なりしかば小西と同じ心にても有けん其身もとより秀吉の恩顧あつくそぞろに天下の 東照宮に帰するを見て感激して王陵が節を志し猶恢復の思ひを抱きし事 宮の照し給ふ通りにてや有けん

一、肥島戦記に筑前大島にてとらへたる伴天連伊留満同宿等白状のうつし書をのせたり其辭に曰

いたかやうまといふ処に切死丹宗門頭はつわといふ者あり国国へ伴天連を遣し宗門をひろめはつわに随ひてはやうはやう奉行を遣ししおきを致候のびすばんは呂宋なり外国を多く

貪りとれり日本は中中軍にてはなりがたき故後生の宗門を広むる為の伴天連をわたすべきとの義なり一人は黒川壽庵と申候年来日本へわたり可申よし物がたり申候其外日本人の子五六人呂宋にて只今学文致させ亜媽港にても日本人の子十二人学文致させいづれも伴天連にとり立日本人に致可申由承り候伴天連多く方方の国見仕立置申候此者共連連日本に渡可申由にて切死丹ひろまりし時分日本の出家へ金銀を出し切死丹宗門に致し其外日本いるまん同宿を諸寺諸山に遣し学文を致させ仏法神道の極意を習ひはつわの方に遣し南蛮口に引直し板におこし国国の伴天連どもへ遣し学文致させ申候いづれも法をひろめ己に従へんとのたくみにて候事

未九月八日このもの忠節申上候とて屋敷扶持まで賜ると有又をくに 大猷院殿の御時井上筑後守切死丹の案内者たるよし 台聴に達し切死丹改奉行になされける此時長崎奉行竹中采女正なりしが黒船来り伴天連三人日本より先年追放たれたるものを案内者として来りしが推問きびしく白状しける故伴天連死罪をゆるされ江戸飯田町に屋敷を給はり扶持し給ひけるほどに終には国恩を感じ禪宗に帰し記請文を捧げける日本の案内者は皆死罪に行はれ獄門にかけられ其船は焼捨になりぬ飯田町の屋敷は石垣一丈二尺の高さにして一丈の屏を四方にめぐらし忍びがへしの釘さきを内にむかせ昼夜の番嚴重なり世に是を切支丹屋敷といふとなり上の事と一事にや別事にやしらず

一、肥島戦記に曰切死丹制禁の由来は秀吉の時諸宗の僧侶よりの徒発興し堂塔寺院破滅に及ぶ事を歎きけるより文禄四年乙未秀吉ことごとく制禁の令有しかどもさのみ吟味といふほどの事はなくて過ぬ 東照宮ふかくかの奸をてらし給ひ本多佐渡守正信同上野介正純奉行として大久保相摸守忠憐上京して奸賊を正し諸国の家士民間までくわしく禁あり其内黒田主水有馬修理太夫家士にかの徒多きよし本宗にかへらしむべき内意ありて各仏宗に帰しめ慶長六年板倉伊賀守勝重京都の所司代として都のあたり探りもとめ伴天連の徒を本宗に帰せしめもし本宗にかへらざるもの異国人はその国にかへし彼寺院ことごとく焼はらひその党の者ことごとくからめとり俵にまき五條の橋の辺につみかさね鉄杖を以てうちたたきころべころべとせめさいなみ猶屈せざるをば長崎に送りて刑しけるころぶとは切死丹より本宗にかへる事なりその時の狂歌に

ころび吹尺八竹を切死丹俵にまかれこも僧になる

武徳編年にもこの事をのせて慶長十八年十二月耶蘇の徒京師に散在するよし聞召大久保相模守忠憐上京しこれをはらひすつべきよし命ぜられよつて忠憐都に上りあくる正月洛陽大阪堺の耶蘇をとらへ長崎に下し糺明ありよつて西京四條両寺の僧侶等鎮西に下りしかば切死丹寺ことごとくやき払ひけるとあり

一、此頃は耶蘇の教行わたりて貴賤なべて其毒に沈めり蒲生家の鋭士佃又右衛門といふ有後

福嶋正則につかへしが是もその毒にそみぬ 神君勇武を惜みしばし教訓なし給ひしかども其酔さめず誅に服しぬこれ慶長十九年の事也その頃原主水といふものありもとより耶蘇にそみ一旦とらはれしかどものがれ出跡をかくしけるが坂東よりさがし出され十の指をきられ額に焼印をし此者愛育するものは曲事に行ふべきとの制策を負はせ放逐せらる此もの岡越前守貞綱が子平内といふものかくし置し事顯はれ吟味の処貞綱ゆめゆめしらず平内かねて浮田家の浪客明石掃部全登が聳にして(浮田秀家関原にて敗軍の時明石掃部いさめて我所領備前岡山にしりぞき天下の勢を引受心よく討死せんとていさめかへりし人なり秀家げにもとて国にかへりける留守共早立退き郷民町人等城中にたくはへたるもの共うばひさりける程に秀家芦森に立のき掃部秀頼より招かれ後藤又兵衛等と籠城しけると落穂集にみへたり)

明石原岡ともに耶蘇宗の交ふかかりし故となりよつて貞綱は免許を得平内は改易せらる駿府槇<sup>マキ</sup>谷耕雲寺にもしばらく主水をとどめける事あらはれ住僧罪をうけぬ主水かねて 神君の侍女と通じけるが彼女主水が重科にあはんとするをみてひそかに悪道をはかりけるが是も事あらはれて死刑に行はる程なく大坂に戦おこりに越前守主水が弟忠兵衛この事をうらみけるにや籠城をとげ落城の時父子兄弟ともに戮につき長く家門を亡しけるその頃何の清安といふもの耶蘇の徒にて牢舎しけるが獄中にて罪人をふたりかの宗門に引入けるよつて是又主水が如く十の指をきり額に焼印をあて追放たる是等の事武徳編年にみへたり

一、采覧異言を按ずるに西洋は歐邏巴の地なり南蛮といふものは西洋の船の来る道を呂宋にとる故也くる船とよぶものは瀝青マツヤニにて船をぬれる故いへる也天文十年辛丑はじめて豊後に来る（按ずるに長崎縁起の説と年数異）是波羅多伽児ホルトガルのふらんすくすさべいうす名だかき彼国の教師なりからの書には仏来釈古者フライシクサとあり同十二年さつま種子ヶ島タネに家る南浦文集むらしゆくしやといふも此人なり豊後より天正十二年春植田玄佐ウサダといふを遣せりもと此ものは美濃齊藤の氏族なり其子を携へてかの国にゆきしが羅馬国にて死けり今に其墓ありとも羅馬のよろんはつていすたしろんといへるが新井筑後守に其像を出て示しけるとなり天正十五年太閤つくしに下り給ひし時教師の礼なきをいかり驅カツて境を出さしめ給ひしかども通市はもとのごとくにして貪るものは利を追ひ愚なるものは教にまどひ終には前後戮に陥るもの二十八万人に及べりはつていすたが言にこのふらんすくもと加西蠟カステイラの王族天下を周流して方に随つて行化し我国に來り都にも入り西に帰らんとして臥亜にて死せり是を金棺に葬りて今猶いけるがごとしそれがしここに來るにも其塔を礼拝せりとなり筑後守この事を和蘭陀にとはれしに其棺四牆玻璃の板を嵌せり就て見れば瞑目跌座毛髪かぞふべし是は大西に孛羅国ヘラックといふ国に巴爾婆摩シヤモといふ木あり此木の汁をぬり置ばくち傷れす如徳亜エツフテの妖人ども是を以て人をたぶらかす事多しとなりさんこの国禁つよくなりても來りし人多し西齊里亜シハリアといふ島よりこんはにやよんせうといふもの其徒にてありしが才辨あり著書三卷有しとかや是は官より衣食など給は



り岡本三右衛門と称して年七十餘延宝中に死しき寛永己卯波羅泥亜の人かくれて居けるを有司とらへて斬るこれその国王の侄あるへるといへり年二十餘又那勿蟬といふ国の王まかせいろといへる人ふかく天教を尊び自あまねく四方にこの道をひろめんとちかひ呂宋より長崎に來り寛永丙子のとし戮につけりさてこのはつていすたといふもの寛永戊子のとしさつまの海上に一大船数日みへつかくれつせしが程なく西をさしてさりけり此日屋久島にてかたちは我國の人のごとくにして言語さとすべからざるおのこを得たり島人あやしみこれを長崎に送る比とき 文廟新に職につかせ給ひ新井筑後守をめて事の由を問しめ給ひけるにむかしの冤を訴へ我國の禁をひらき貢市をもとめん為なりしとぞ此筑後守即白石先生なり此者博識にして地理にくわし白石の采覧異言は此人の説を主とし取れり耶蘇の法を弘めん為に來れる故江戸にて刑につけり白石の五事略にみへたり

一、呂宋は西洋歐羅巴の地方伊西把你亜より治む慶長の頃書を奉り物を賜りし事どもあれども呂宋国王にはあらず伊西把你亜の官人のする所なり臥亜は歐邏巴の内波羅多伽兒より官人を遣し置亜媽港は臥亜より兼帶す咬囉吧は阿蘭陀に属す其外南蛮中阿蘭陀といふありこれ阿蘭陀よりとりたりとみへたり我邦の下に亜墨利加といふあり歐邏巴のうち伊西把爾亜より此内一方をとりて今新伊西把亜といへりかくのごとく其国の備なきをうかがひ金銀酒食衣服を以て人の国を奪ひとる我国東照宮の明よくここをてらし幸にして蒼生この日月を戴く事を得

たり伊西把爾亜も寛永元年使を奉じて来り貢す其三百人これ天主の徒なるを以て其聘をしりぞけ給へり事皆五事略にみへたり阿蘭陀などいたつて小国なりその与国七つもし無道の人あれば相議して其主をかふ右七国の主より合て大船を作り咬啗吧のあたりに官人を置き諸国に遣し交易す十五年に一度總勘定をして其利をわかちとるときけり伊吹もぐさに外国我国をはかる事を奉たる一段は異国に不案内なるより街衢愚陋のうはさを書とめたりとみへたり信ずべからず地理事故によつて考ふるに伊西把爾亜波羅多伽児のあたりより奸を我国にいれそれより其他の国よりも我国を伺ひしとみへたり和漢の人干戈をうごかし人を威服すると其術大に同じからず有国の人ふかく其奸をしらざるべけんや

一、先あらましをかながふるに其教師は僧の様なるものにて天主といふものを造物者の位に置いて三世をときて人をすすむるとみへたり其故は破吉利支丹にきりしたんの教にでうすといふ仏天地の主にして天地万物の作者なり畜類にはまことの魂をあたへざるゆへ此身死すれば靈もともに死す人にはでうすまことの靈をあとふる故身死しても靈死せず今生善惡の業により苦樂をうく善業の者をばはらひぎうとて樂つきぬ世界をつくりて遣し悪業のものをばいぬへるぬとて苦界をつくりて是へおとす日本にて日月を敬ふ是はでうす世の中の行燈につくりたるものとよくよしきけりとあり白石先生采覽異言邏馬国ロマンの下に其国王教化の主にして法衣るりちよとて西竺の僧袈裟のごとしとありかれこれ考へあはすれば衣服別に其制をわかち天

主といふ本尊をたて三世をたて極楽地獄をわかつては其教大に聖人の道にことなる事しるべし  
 聖人の教は天を畏れつつしむといへども專人倫の教なりしばらくたとへをとりていはんに儒  
 者の尊む所は孔子なり今もし暴君ありて聖堂をこぼち聖像をやぶり学校を廃せんとせば其任  
 にあたらん人力をつくしなげきいさむべし猶用ひずして其志を行はば儒を以て守るもの或は  
 機を見てたつべし或は屍を以ていさむべし我奉ずる所のあだなりとて其主に弓ひくものはあ  
 るまじ又異国より周公孔子の像をさきにたて襲ひ来る事あらば儒を業とするもの鎗先をそろ  
 へさんざんにふせぎ戦ふべし其故は聖人の教は其君を君とし其父を父とするの教にして君父  
 を外にして別に尊むものなければなり外教のごときは愛利をかりて人を慾に道びき幽冥の内  
 に苦樂賞罰をまうけて畏樂の心をつくし君よりも父よりも尊きものをこしらへ慾心のくらき  
 より冥途に香餌をまうけ人のまどひをかたうし我一身の為に君をうしろにし奉るを心をやし  
 なはせ其機をうかがひ国をうばふの計をなすなるべし我いとけなきより天地にうたがひあり  
 て寢食を廢するばかりなりしが天地に條理ある事をしりて死生幽冥の事も疑網ごとごとく  
 けたり西洋は奇巧すぐれたる国にて天文地理によく達する様なれども唯麁体のみをしりて造  
 物といふ物をしらずとみへたり其故は天主は造物の位なり造物のさかひ此説によらば没交渉  
 といひつべし三世の報応を立るも樂界苦界をわかつも皆觀物の法をしらず天地よりして人を  
 見ず人より天地を見るのあやまりなりまことに世に至辱と称すべき物は天にまされるはなし

モツケウセウ  
 テツテモツ

といへども泥塑木偶を以てかたどるべきにあらず生じて徳とせず殺して罪とせずとかとみてもたかきをくはへずいやしみても卑きをまさず身かたせんとて身かたすべき主もなく仇せんとして仇すべき体もなし故に我天を奉ずるの道は天の威を畏るべし天の則に順ふべし天の命をまつべし故に臣としては忠に死し子としては孝に死し婦としては貞に死す此外に荷担する一物あつて是が為に君父を後にする道なしもし君父夫の変にあはゞ我身死してやむより外他なし君を尊め親を尊めと教ふるむかしの聖はたうとしといへども是を奉ずるとて君父に弓をひく時は是聖人にそむく也このさかひをよくしるべしかつ邏馬人の儒教域中を出ずといひてさみせしは聖人の教も耶蘇などの様にひろめくらべする様なるとする故なり聖人の道とはむかし王者の天下をおさめ給ひし道なり故にひろむる事も党を立てる事もなし君を君とし父を父とし彝倫日用の間に過ぎれば只あるものがある通に行ふなり天地の間に父子君臣夫婦兄弟なきの国なければその樂に相善する道あらば我道をかれにひろむるにもあらず彼と我と同じく其則にしたがふなり礼楽文物のごときはその国国の宜敷にしたがふもとより聖人の教なり君子の道義といふものを重んずる故に我身いか様のたのしみ有とてもすて錢湯炉炭にもいるなり異教の道は我身死後の樂をせんとは上にして君父下にして妻子をもすて是を無上と心得侍るいたむべきかな生ては我生の身を有し死しては此生をすてて化すことをしらず死して後も生て居るとおもふ愚癡より死後冥冥無用の福をもとめんとて生前不義に身を落し百

年の性命をそこなふされば益田が身天使と称し障眼の小術に造物もその其指揮に従ふ様にいひふらし鳥をとらへてみせたり卵をうませてみせたりテッパ弓箭もあたらざるなどいひしも首陣氏が手にいり其徒嚙類なくなり屍の上に奸賊の臭名を蒙らしめし事小妖術只しばらく人の目をまどはすのみにして人事の正にかたざる事顯然なり聖人の道は君臣父子夫婦兄弟朋友を五達道といひて智仁勇の三達徳を以て此五達道を行ふ事なれば雲行雨施すの天命より外にさしはさむべき術もなしたとひ天地を動し雲雷を鼓する術ありとても何かなるべき邪徒は人の思議に落がたき事をなして人を欺くされども是又造物をつかふ事もならずみな機巧をまうけてなす事なり蠻人初來の日自鳴鐘望遠鏡トケイトウメガネなどもち渡りて人を驚かせしが今は人もなれて常の器ともふなり西域の人もろこしに來り刀をのみ火をはき人を驚かせし事有法苑珠林に火をはく事は其しかけあるよし説りしかるに今は蠻国よりゑれてぎるとて人の身にあて火を出す器も來り皆人これを知れり刀をのみ針をのみ様の事は今は六文出せば何方の市に行てもみる事なり不思議奇妙といふ事も皆しな玉の手目を見せぬなり又邪徒の夜陰人なき地にてなき魂にあはせ又かが見に鬼畜のかたち又柔和の相をみせ人をたぶらかす様の事は今もときとしてはきく様なりそれにつけてこの頃おかしき咄きけり某の処の婢女あけくれに隙さへあれば鏡を出して自照し自愛するもの有けりわかきものは是をしり女の出ける隙其鏡をとり出してたてに力をいれておしまげしらぬふりして有ける婢女しらずして又例のごとく鏡とり出してむかひければ

横はせまくなり只たてに長き顔のうつりける程に驚きて鏡をなげうちいかなれば我はかくは  
 なりはてけるぞと泣きけるとかや鏡の術みな是にたくみをくわへたるなりかくあさましき事  
 なれども衆智はおろかなるものにて一犬虚を吠て万犬虚に伝ふる習なればなきことをありし  
 様に唱ふるが世の様なり我かく常に虚説を破すれども世に我いつの頃は大風吹べし地震すべ  
 しなどいひしとしばく噂せらる書籍伝記にのせたればとて具眼の人の迷ふべきにはあらざ  
 れども神通自在といふ名目をかりて人をたぶらかし奸人財を奪ふの謀をなすむかし舜の臣に  
 夔といひて樂に達せし人あり夔一足とて夔は足一つなりと世につたへたり実は夔は樂の名人  
 ゆゑ夔は一人にして足れりといふ事にて有けり又宋人井をほりて人を得たりといふ沙汰世に  
 いひはやせり行て是をきけばかねては水遠く水汲みひとりやとひしかども井をほりて後は人  
 を一人得たりといふ事なりしとぞ又ある処に回国に出ける人あり暫ありて其回国は鬼に成た  
 りと故里にきこえけり妻子なげきにたへずかれこれと問けるにそれは誰こそたしかに逢たり  
 といふしるしに其人を尋ねて問ひければいなさにはあらず何の国にて其人に逢ひしに我故里  
 にては病がちに月日を送りしが旅におもむき侍りて一日もやめる事もなく今は鬼に成たりぞ  
 といひ笑ひて別れ侍るとかたりしにぞ妻子も心やすらに成てかへりしとや今伊綱の法などい  
 ふはなしにその席にては波を湧かし、かれの処にては牛をのみしなどいへども畢竟誰見た  
 る人もなしたまたま見たる人は大かたは頼まれぬ人なり今の世にあやしき事をなして幽冥の

間にまどはせば其おぼろおぼろの心よりそれに沈淪し目にもあやしきかたちを見夢にもあやしき事を夢見彌服花耳声にまどはされ醉生夢死してやむのみか大に世の騷乱をいだすあなかしこ君父たとへいかなる僻事ありても君父にそむくといふ事は蠻人の道にはなき事なれば別に我奉ずる処をたて君父と争ひ拒ぐ様の事あるべき様なし国家を有する君はつとめてこの境をよく教へ道引給ふべき事なり尚書に地天の通をたつといふはこの事なり勿論聖人の道といふものは仁義といふ物あり義にあたらざる事あれば君の命を奉ぜざる事ありやむ事を得ざればいさめて死する事あり君にそむくの道はあらず其いさむるといふに不義に随て君を不君に陥らしめざるが為なり君父の外にひとつの尊きものをたて極刑にあひても君にそむきても我死後のむまき樂にはかへじといふ様なる教はあらず故に聖人の道は義を以て我身の苦樂にかへず異教のごときは義といふものなき故かかる世のさばきをなし侍るしかれば後世に君たらん人此事にこり人の耳目をあきらかになし給はば必ずかかる憂はあらじ其耳目を明にする道は詩書の教を施すにあらんか

- 「五月雨抄」(『梅園全集』上巻、梅園会、名著刊行会発行、二〇一〇年十月)所収。
- 本文中罫字の部分は空白で表示した。
- 原文の旧字は一部を除いて新字改めた。
- 本文中の句読点は、原文のまま。
- PDF化には`LaTeX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>